

政治家

馳 浩

学生時代から
今に至るまで



衆議院議員会館にて

はせ ひろし

1961年5月5日、富山県生まれ。石川県星稜高校でレスリングを始め、高3で国体優勝。専修大学ではレスリング部の主将を務める。84年専修大学文学部国文学科卒業後、母校星稜高校で教鞭をとりながら、ロス五輪グレコローマン90kg級に出場。翌85年、プロレスラーに転じる。95年7月、参議院選挙石川県選挙区で初当選、2000年6月の衆議院選挙で石川1区より出馬し当選(参院1期、衆院6期)。15年10月から16年8月まで文部科学大臣。現在は、一人娘が専修大学に通う。

高校教師にして、ロサンゼルスオリンピックのレスリングに出場。その後、プロレスラーに転身すると、やがて人気レスラーに。さらに国政に打って出て、数々の教育関連の議員立法に関わり、文部科学大臣としても奮闘——その類まれな人生を、振り返ってもらった。

その後の人生を支える学生時代

「高校生までの甘い考えが一瞬ですっとんでしまうような大学生活だった」という。

高校時代に国体のレスリングで優勝すると、複数の大学から誘いがあったが、その中から専修大学を選んだのは、レスリングが強くて国文学科があったからだ。「将来は地元石川県に戻り、国語教員になる」という夢を抱き、入学したのが1980年のこと。

レスリング部の練習は朝と夕にあった。そして勉強もハードだった。国文学科の恩師、中田武司教授(現名誉教授)には毎月のように原稿用紙20枚の論

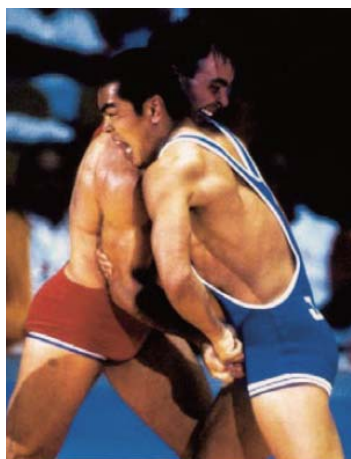
文を書かされた。さらに教職課程の授業も履修した。

「6人部屋の体育寮で、折り畳み式の座卓を布団の上において勉強していた」と懐かしむ。大学時代は、スポーツと学問どちらか一方ではなく、両方に取り組んだことが相乗効果を生んだという。

「スポーツと学問は通じていると思う。レスリングでは対戦相手を分析し、自分の実力がどの程度にあるかを想定しながら、実力の上積みを図っていった。これは論文を書く際のアプローチとも似ていて、学生時代は、国文学の勉強がレスリングにいい影響を与え、レスリングの練習が文学の研究にも役立った」



↑ 84 年、母校星稜高校で国語教師に。レスリング部の顧問も務めた



↑ 84 年夏、ロス五輪に出場。予選敗退に終わったが、五輪出場の経験がその後の人生を変えることに



↑ 06 年 8 月、両国国技館で行われたプロレス引退試合。21 年にわたる選手生活に別れを告げた



↑ 15 年 10 月、第 20 代文部科学大臣就任の会見

4 年次の秋には、オリンピック候補指定選手にも選ばれた。だが、卒論の追い込みの時期と重なったため、強化合宿には大量の文献を持ち込んだという。「自分でも、よく頑張ったと思う。あの時の経験が、卒業後の人生を支えている」

高校教師からプロレスラーに

84 年に専大を卒業し、母校、石川県星稜高校の国語教員になった。そしてその夏、ロス五輪に出場。この五輪での体験が、人生を大きく変えた。

「スポーツで人を感動させたい」

教壇に戻ってからも、熱は冷めなかった。専大の先輩、長州力氏からプロレス界へ誘われていた。

「今しかできないことをやろう」

悩みに悩んだ末の決断だ。翌年、24 歳でプロレス界に身を投じた。だが、人気と実力がものをいう厳しい世界で生き残ることは、たやすくなかった。

「観客にも、レスラー仲間にも認められなければ居場所はなかった。受け身の取り方など、基本的な技術は人真似だが、自分だけにしかない技の開発、試合の組み立てなどは、自分で工夫していった。でも、苦しいと思ったことは一度もない。自分で自分を演出するのは楽しかった。向いていたのだと思う」

政治家として何ができるか

政治家としてのスタートは 95 年、34 歳のときだ。当時の自民党幹事長、森喜朗元首相から声がかかったのがきっかけだ。

「元高校教師でオリンピック選手。プロレスラーとしても知名度があったので、そこに目をつけられた。ただ自分としては、国会議員になって何をしたいのか自問自答した。そこで出た答えが、北朝鮮との国交正常化、そして日本の教育をよくすることだった」

あれから 22 年間で参院 1 期、衆院 6 期を務めた。2015 年 10 月から 16 年 8 月には文部科学大臣に就き、長年取り組んできたいじめや不登校の問題、給付型奨学金制度の創設などの課題に方向性を示した。今後は、「文部科学行政と障害者福祉を柱にしつつ、日本海側の開発にも取り組みたい」という。

「存在感を増す朝鮮半島、中国、ロシアとも向き合いつつ、北陸新幹線による高速交通体系もできあがり、時代の軸が日本海側に移ってきている。太平洋ベルト地帯の対として、日本海側にもう一つ、日本の柱をつくっておく意味は大きい」

これまでの人生での挫折を問えば、「ない」と答える。その理由については、

「いつも最悪のことを想定し、どうしたら自分が納得できるか順番付けをして、決断を下してきた。選挙に出馬するときも落選することを考えて、それでも周りを巻き込んで努力したなら、世の中に関わったという経験が残ると思った。適当にやったら後悔しか残さないから、やるからには本気。何事もそういう思いで取り組めば挫折も後悔もなかった」

37 年前に専大の門をくぐってから、幾多の曲折を経て現在に至る。この春も、専大の門を多くの若者がくぐった。その学生たちに向けてメッセージを求めると、シンプルで力強い言葉が返ってきた。

「お前も頑張れ、俺も頑張る！」